

タリバンとは何か

―アフガニスタン政治文化の中で考える

内戦による混乱から社会秩序の回復を目指し、イスラーム学生たちが結成したタリバン。

国内では軍閥・北部同盟との闘争が続き、

多種多様なイスラーム思想の流入でポリシーも変化してきた。

その系譜をたどり、今後の統治のかたちを考察する。

登利谷正人

東京外国語大学講師

とりや まさと バキスタン・ベシヤール
大学大学院留学、上智大学大学院博士後期
課程単位取得満期退学。博士「地域研究。
日本学術振興会特別研究員などを経て現職。
専門はアフガニスタン・バキスタン地域研究、
バシュトゥーンの言語文化。著書に『近代アフ
ガニスタンの国家形成歴史叙述と第2次アフ
ガン戦争前後の政治動向』。

八月五日、アフガニスタンの首都カブールを包囲して
いたタリバンは、ガニー政権の自壊によりほぼ無血で同市
を占領した。奇しくも、タリバンによるカブール入城から
四日後の八月一九日は、アフガニスタンの独立記念日で
あった。一九一九年のこの日、当時イギリス保護国下のア
フガニスタンは第三次アフガン戦争を経て独立を獲得し
た。それから六〇年後の七九年二月には、その後現在ま
で四〇年以上続く内戦の端緒となった、ソ連の軍事介入と
いう事態が生じた。そのソ連軍も長期に及んだ戦争に疲弊
し、一〇年後の八九年二月には完全撤退した。

このように、過去約一〇〇年の歴史を振り返ると、アフ
ガニスタンはイギリス、ソ連、そしてアメリカという各時

代の超大国から軍事侵攻を受けたが、結果的に全てを撃退
している。アフガニスタンは国際関係の文脈において、た
びたび世界の耳目を集めてきたが、他方、国内の政治的動
向や社会情勢についての理解は不十分な状況にとどまって
いると言えよう。そこで、本稿では現在のアフガニスタン
の状況とタリバンについて理解するため、まず同国の政治
体制を歴史的に振り返り、時代ごとの特色について全体像
を把握する。その上で、タリバンの思想や行動様式の基底
をなす考え方を検証すべく、アフガニスタンに流入したイ
スラーム思想の主要な類型について述べる。加えて、タリ
バンという組織の構造について検討し、今後のタリバン統
治の課題を考察する。

近現代アフガニスタン統治体制の変遷

アフガニスタンは、一九世紀後半のイギリス保護領下から領域的枠組みが形成された。ここでは、以後現在に至るまでの統治体制の変遷について概観する。

一九世紀後半、イギリスはアフガニスタンを保護国とした。その上で、ロシアやイランなど周辺国との国境画定作業が、基本的にイギリス主導で進められた。その後、一九一九年の第三次アフガン戦争の結果、アフガニスタンは独立を達成した。

独立後の国民統合政策において、当時の国王アマーヌッラーは社会的上層を形成することとなったエスニシテイ集団であるパシュトゥーンを軸としつつ、欧米諸国の統治制度の導入に努めた。この政策の一環として、国家の重要事について国内のさまざまな有力者が一堂に会し議論・採決を行うため「ロヤ・ジルガ」を設置した。これは、ジルガと呼ばれるパシュトゥーン社会における問題解決のための議論の場、すなわち寄合を、国家の統治機構にまで拡大した制度であった。他方、アマーヌッラーはヨーロッパへの長期視察後、ヨーロッパの文化や制度を導入することで、アフガニスタン社会の「近代化」を一挙に促進した。この

ような急激な社会変化に対して地方からの反乱が勃発し、アマーヌッラーは退位を余儀なくされて国外に亡命した。

その後、王家の傍流にあたるナーデル・シャーが、アフガニスタン・英領インド領域のパシュトゥーン諸部族の軍事的支持を得つつ、内乱を鎮圧し一九二九年に即位した。それから一九七八年の共産主義革命に至るまで、アフガニスタンではパシュトゥーン化政策を軸とした国民統合が進められた。外交的には、第二次世界大戦以後の米ソ冷戦期、基本的に中立政策に基づく国際強調と、東西両陣営からの支援獲得に努めた。この中立政策を象徴するように、同時期には世界中から新たなイスラーム思想や共産主義などさまざまな考え方が流入した。

七八年の革命により、アフガニスタンには共産主義政権が設立された。これに伴い、社会の急速な共産主義化が進められた。共産主義政権下では、文明化・世俗化の名の下に各地域社会の調整役・相談役として機能していたイスラーム知識人たちを排除したり、小作人解放に代表される農地改革などが断行されるなど、極端な社会政策を実施した。

一連の施策は、地域社会から強い反発を招き、社会は大きく混乱した。このような最中、七九年には共産主義政

権内部の対立に介入したソ連軍の軍事侵攻を契機に、ムジャーヒディーンと総称されるイスラーム系諸勢力がパキスタンを経由した西側諸国の支援を受けつつ、武装闘争を開始し内戦が勃発した。その後の経緯は冒頭で述べたとおりである。

一九九二年の共産主義政権崩壊以降、ムジャーヒディーン諸勢力による政権樹立が模索されたが、各派の対立に基づく激しい内乱が勃発し、首都カブールはこの時の内戦によって壊滅的被害を受けた。無政府状態となり全土で治安は乱れ、各地には軍閥勢力が跋扈した。このような状況の中、社会秩序の回復を目指すマドラサ（イスラーム諸学を修める寄宿制の教育機関）の「学生たち（タリバン）」が決起した。

当初、混乱する社会情勢を憂えた人々から支持を集めたタリバンは、短期間で各地をほとんど無傷で制圧した。しかし、対タリバンにおいて協力関係を結んだムジャーヒディーン勢力により「北部同盟」が結成されたことで、戦争状態が継続することとなった。また、統治経験のないタリバンの支配に大旱魃が重なり、人々の失望も高まっていた。そのような中、9・11が発生し、タリバン政権は崩壊した。その後は、アメリカを中心とする国際社会によ

る「新国家建設」と復興支援が実施された。しかし、カルザイ・ガニー両政権は旧北部同盟の「軍閥」組織を内包したため、政府内部も地域やエスニシティに基づき分断され、権力闘争が常態化するなど、大きな問題を抱えていた。

イスラーム思想の流入とタリバン

タリバンの思想や行動原理は近現代アフガニスタンにおけるイスラーム思想の流入過程を振り返ることで、理解が容易となる。そこで、二〇世紀半ば以降、国外から流入した大きな影響を与えた主要なイスラーム思想の流入過程を三つに分類して簡潔に述べる。

一九五〇年代後半から、エジプトのアズハル大学に留学し、当地でムスリム同胞団にも加盟した留学生を通じて、アフガニスタンに新たなイスラーム思想が流入した。カブル大学ではこの新たなイスラーム思想について学ぶための研究会が結成され、大学の教員や学生が集った。この学内の研究会は後のイスラーム協会の前身であり、ラッバーニー、ヘクマティヤール、アフマド・シャー・マスードなど、その後対ソ連・共産主義政権戦争を戦ったムジャーヒディーンの主軸となる人々が参集した。このようなイスラーム思想の流入と並行して、共産主義思想も流入し、政

治・社会・文化などさまざまな面で影響を及ぼした。

また、アフガニスタンの国土の大半を占める地方部、特に東部・南部を中心としたパシュトゥーン人が分布する地域においては、一九世紀以降、現パキスタンに位置した連邦直轄部族地域（FATA・二〇一八年に州への併合により消滅）から新たなイスラーム思想が流入した。当該地域では、無数に存在する部族社会間を連結する仲介者としてのイスラーム知識人たちが、主に人的な結びつきに基づく独自の知的ネットワークを形成していた。これは、一九世紀中期に近代イスラーム改革思想を教育・研究するためインド北部に設立されたマドラサ、デオバンド学院の影響を受けたものであった。デオバンド学派と総称される南アジアの知的ネットワークを軸としたイスラームは、FATAを中心に在地のパシュトゥーン社会の慣習と結合し、地域の社会規範や慣習のあり方を変化させつつ、新たな秩序形成を促した。

加えて、対ソ戦争期にアフガニスタンに流入したアラブ義勇兵などを通じて、アラブのイスラーム思想の流入の影響も重要である。アラビア語を介して直接「本場」のイスラーム思想に触れた若者たちは、既存の地域社会において当然視されてきたイスラーム思想に疑問を抱いた。

その他のさまざまな事例を含め、多様なイスラーム思想がアフガニスタンに流入し、人々の認識や社会形成に多大な影響を及ぼした。これらの思想は有機的な結合と融合により、常に変化しつつ拡大・発展している。特に、地方部では伝統的な部族的価値観や慣習が、新たなイスラーム思想の流入により変化を余儀なくされ、年長者と若年層との対立や摩擦を引き起こすことにもつながった。タリバンの思想や行動様式も、アフガニスタンに流入したさまざまな思想の影響を受けている。

タリバン内部の状況

タリバンの中核を構成するメンバーは、三つに大別される。第一に、結成初期からの古参メンバーとその関係者たちである。結成時のメンバーはアフガニスタン南部のマドラサの学生であったと言われている。創設メンバーであったモッラー・オマルをはじめ、九月に発表された「暫定政権」において「首相」と位置付けられたモハンマド・ハサン・アーホンドや「副首相」に任命されたアブドゥル・ガニー・バラダールなどがこの分類に該当する。加えて、「暫定政権」において、国防相代行に選出されたモハンマド・ヤークラブは創設者オマルの息子であるが、彼のように創設メ

ンバーの「第二世代」もタリバンの中核をなしている。

第二に、一九九〇年代中盤のタリバンによる治安維持と社会の安定という目標に共鳴し、比較的初期段階でタリバンの加わったメンバーたちである。特に重要な人物たちとして、七〇年代前半のダーウッド政権期から政府批判を繰り返してパキスタンに亡命し、その後対ソ戦争に参画したユヌス・ハリスらがいる。ハリスはイスラーム党ハリス派を率い、八〇年代にはパキスタン軍の情報機関やアメリカCIAから支援を受け、対ソ連・共産主義政権と戦った。ところで、ハリスの側近として同派のナンバー2を務めていた人物が、後にアメリカなどから「テロ組織」と名指しされ、「ハッカーニー・ネットワーク」を設立したジャラルッディーン・ハッカーニー（タリバン「暫定政権」で内相代行に任命されたセラージュッディーン・ハッカーニーの父）であった。ハリス派は東部ナンガルハール州を地盤とし、同州各地の部族諸勢力を基盤としていた。さらに、ハリスやジャラルッディーン・ハッカーニーらハリス派の中心メンバーは、パキスタン北西部のデオバンド系マドラサであるハッカーニー学院で学び、その後も長くパキスタンを拠点に闘争を継続した。そのため、ハリス派も、パキスタンにおけるデオバンド系のイス

ラーム思想の影響を色濃く受けた。加えてこの時期、対ソ連戦争に加わるため、後にアルカイダを結成するオサマ・ビン・ラーディンら多くのアラブ義勇兵が来訪したが、彼らをさまざまな面で支援したのも、アメリカやパキスタンであった。ソ連撤退後に行き場のなくなったオサマ・ビン・ラーディンらアルカイダのメンバーをアフガニスタンで受け入れたのは、かつて共に闘ったハリス派であった。ハリス派のタリバンへの合流にともない、アルカイダとタリバンとの共闘関係が生まれた。

治安情勢がきわめて混乱していた九〇年代中盤は、治安回復と社会的安定を求め、非パシトゥーンを含めた一定の知識層がタリバンに加わることもあった。このような、タリバンの中枢を構成する指導層は、国内を含めデオバンド系のマドラサで教育を受けている場合が多く、パキスタンやサウジアラビアでイスラーム関連の学問を学んだ経験のある者も存在する。

しかし、タリバンメンバーの圧倒的多数は、単純に勢力拡大に乗じて「強者に媚びる」形で参画した者たちである。この傾向は現在も同様であり、したがって明確な加入・脱退条件が存在しないタリバン構成員は、非常に緩やかにまとまった集合体だとも言える。すなわち、一度タリバンが

勢いを失った場合には、これら大部分を占める人々が空中分解することは必定であろう。

「タリバン政権」統治の課題

タリバンはもともと、長期間におよぶ戦乱から生まれ、社会秩序の回復、つまり治安維持と社会的安定を掲げた組織であった。現在もこの基本的な軸は変化していない。しかし、タリバン中枢メンバーたちは、対ソ戦争期から現在に至るまで、絶え間なく戦闘を継続してきた。一九九六～二〇〇一年の間は国土の九割を支配したものの、大旱魃や国際的な経済制裁、あるいは女性隔離や公開処刑などに見られる当時のタリバン統治に対する国際的批判の高まりを受け、内政・外交両面において非常に厳しい状況に直面していた。したがって、結成からまもなく三〇年になろうとするタリバンは、実際に内政・外交を実施した経験はほとんどなく、政治の実務を担える人材もごくわずかであると言える。また、経済的側面から考えた場合、基幹産業である農業は長年の戦争と旱魃により極めて大きな被害を受けており、国際的な支援も一部を除き停滞を余儀なくされているため、今後は非常に厳しい状況に陥ることが予想される。政治運営と社会・経済政策の面で安定をもたらすこと

ができず、アフガニスタンの人々の生活状況がなお一層苦しいものになった場合、タリバンに対する人々の不満が高まり、その対応をめぐりタリバン内部で分裂が起こる可能性も否定できない。

多民族国家アフガニスタンでは、各地域に分布するエスニシティ集団のまとまりが強調され、それによる分断が対立構造を生んできた。他方、現在のタリバンは、そのような考えから脱却し、イスラームの名の下にアフガニスタン国民としての一体性を強調し、民族ごとの相違を超克しようとする姿勢が見られる。もともと、タリバン指導部がそのような統治方針を有していても、各人の持つ思考がすぐに変化するわけではないため、ハザラ人などマイノリティーに対する蔑視という傾向はすぐにはなくならないであろう。他方、近年はハザラ人と並んでISホラーサーン州による主要攻撃対象になり、人口が激減している非ムスリムのマイノリティーについては、いっそう厳しい状況に直面すると考えられる。また、地方と都市間での社会感覚の差異への対処、欧米などが懸念する女性や人種をめぐるさまざまな問題に対してどのような政策を策定・実行していくのかなど課題も多く、今後のタリバンによる国家運営は多難な状況が続くと言えよう。●